広報あつま
2021年 令和3年 7月号 NO.827

ATSUMA LOVERS

水田では今、分げつした茎から伸びた葉がヒラヒラと風に揺れています。夕暮れ時になると、幾何学模様のシルエットが水面を飾ります。東和地区の農家３代目、畑嶋賢蔵さんは、農地拡大に伴う省力化の農業を目指して水稲の直播栽培を試みています。温厚で研究熱心な畑嶋さんを訪ね、思いを聞きました。

Vol.15

探求心旺盛な農家３代目
畑嶋（はたしま）　賢蔵（けんぞう）さん（60歳）

直播栽培で水稲栽培の効率化を目指す

畑嶋家の農業の始まりは、大正13年。19歳になった祖父が、1.9haから始めました。水田はその後、父の代で8haほどに拡大。近代化農業を見据えて、町内で真っ先に手押し用の耕運機も購入しました。小学生のころの記憶がよみがえりました。「普段通り、学校から帰って作業のお手伝い。おばあさんは鍬で、その横で馬と手押しの耕運機で田んぼを起こしていました。近所の人が寄ってきて、『すごいね』って感心されました。人と馬と機械が混在した農作業が珍しかったのだと思います」。

父から譲り受けた農地は、現在、約32haになりました。少子高齢化などによって後継ぎが減り、休耕地を購入したり借りるなどして“米どころ”を維持する努力を続けています。「作付面積の拡大に伴い、稲作農家にとって生産コストの低減と育苗作業の省力化が、今後の課題だね」と教えてくれました。

解決策として取り組んだのが、1haの水田を使った直播栽培。代かき後に水を抜いて溝を切り、土を落ち着かせて種をまきます。土のかぶり方や温度によって芽の出方は異なり、品質や収量などを検証しています。「試験栽培は、着実に前に進んでいます。来年は、試験水田を4倍にする予定です」と手ごたえを語ってくれました。

農業の傍ら、北海道農業指導士として地域に貢献し、町固定資産評価審査委員長も務めました。「仕事一筋」と言いつつも、30年寄り添う妻信子さんとの買い物や無料通信アプリを使った農作業中の家族との“会話”を大切にしています。

「跡継ぎの息子もたくましくなった。経験を重ねて、更に農業を盛り上げてほしい」。

あなたにとっての
愛すべき厚真を投稿してください

＃ATSUMA LOVERS

フェイスブック
@atsumatownhokkaido

インスタグラム
atsumalovers

ハッシュタグ#atsumaloversをつけてフェイスブックまたはインスタグラムに投稿してください。

発行／北海道厚真町
企画・編集／まちづくり推進課企画調整グループ
ホームページ／http://www.town.atsuma.lg.jp/

〒059-1692 北海道勇払郡厚真町京町120番地
電話／(0145)27-2321(代)
メールアドレス／atsuma@town.atsuma.lg.jp